

桜花会 同窓会誌 目次

■巻頭言

桜花会会長 堀尾 哲一郎 2

■新任教員挨拶

大友 明 5

榎木 啓人 6

米谷 真人 7

大島 孝仁 8

■研究室紹介

碓屋・桑田研究室 9

■卒業生から

垣間見た中国技術の20年 伊澤 楨一 11

技と力 秦野 正治 12

偶然の出会いを大切に 田中 理恵子 15

■同窓会報告

第3回昭和48年入学3類同期会 三上 幸一 16

■最近の大学から

2010年度は？ 和田 雄二 19

創立130年を迎えるに当たり 高橋 孝志 20

忙中、閑あり・・・？ 高尾 俊郎 22

英語で授業を行う 伊藤 繁和 23

■桜花会賞受賞者の声 25

■桜花会企画のご案内 31

■会員の声 32

巻頭言 -桜花会の活動状況について-

会長 堀尾 哲一郎

平成 21 年 4 月 1 日に、古川昌彦前会長の後を引き継ぎ会長に選任されました化学工学コース昭和34年卒の堀尾哲一郎です。基本的には前会長の運営方針の延長線上で運営を行いたいと存じます。桜花会会則によれば、本会の目的は「会員相互の親睦を厚くすることを目的とする」とあり、この目的達成に沿った活動が中心になることは勿論ですが、応用化学専攻の同窓会組織でありますから会員相互の範囲を応用化学専攻の学生や先生方も含めたニーズにお応えする必要があると考えます。そして、今後どのように活動すべきかを役員会で活発な議論した結果、いくつかの新しい試みを含めた次のような活動を行うこととしました。



- (1) 学生と卒業生との交流会：これは企画担当の和田雄二教授の発案で学生に卒業生が企業に於いてどのような活動をしているかを理解してもらい将来の進路決定の参考にしてもらおう一方、卒業生には今の学生の考え方を知ってもらうことを目的としています。第1回は2009.12.12.に蔵前会館で開催しました。参加企業10社、学生の参加50名、卒業生を中心とした企業側参加者50名の合計100名の会となり、学生と卒業生双方から非常に有意義な交流会であったと評価されました。2010.12.11.にも第2回を開催する予定で準備を進めております。
- (2) 桜花会教育奨励事業：横山亮次元会長の発案とご寄付を中心に発足した事業で、学生が海外学会で発表する際の費用の一部を助成する事業ですが、他からの助成を受けていないことが条件の為、現在まで適用がありませんが今後申請があるのではないかと期待しております。
- (3) 卒業発表に対する桜花会賞：毎年学部学生の卒業論文に対して博士課程の学生が中心となって審査し、優秀論文6件に、桜花会が図書券を提供しています。今年は3月3日に行われました。
- (4) 卒業祝賀パーティー：毎年学位授与式の後行われる祝賀パーティーに協賛し祝辞を述べております。今年は3月26日に行われ、学部、修士、博士合わせて70名が卒業しました。
- (5) 応用化学コース（新2年生、新3年生）歓迎会：歓迎会の目的は応用化学コースの研究室の紹介です。企画担当の和田雄二教授のご希望で今年（2010.04.23.開催）から協賛することとなり役員数名が参加し桜花会の紹介を兼ねて挨拶しました。

- (6) 総会、講演会、懇親会：6月26日（土）に開催しました。総会では私堀尾が会員の平素のご支援、ご協力に対して謝辞を述べた後、平成21年度の活動報告と会計報告、平成22年度事業計画と予算について佐治哲夫庶務担当（教授）、高尾俊郎会計担当（准教授）、田中浩士会計担当（准教授）から報告があり原案通り承認されました。会員参加者は約40名でした。講演会は永原肇副会長（旭化成ケミカル（株）取締役）を講師にお招きし「環境との共生：一化学企業の取り組み」についてお話を頂きました。司会進行は田中公章会計監事をお願いして、学生60名、会員40名の計100名の参加者がありました。懇親会では田村吉隆副会長の司会進行で、古川昌彦前会長の乾杯の音頭とご挨拶、小野副会長、中井武副会長にご挨拶を頂き、会員40名、学生10名の参加を得て懇親を深めました。
- (7) 企業見学会：企業の研究所を学生が訪問し、研究施設の見学と研究開発の考え方を聴き、より広い視野から将来を考える一助にしてもらう企画です。今年は小野嘉夫名誉教授（会計監事）にお世話いただき（株）三菱化学科学技術センターを学生10名、卒業生5名程度で10月ごろ訪問する予定です。窓口は田中浩士会計担当（准教授）が担当されます。
- (8) 桜花会同窓会誌の発行：脇原将孝名誉教授が庶務担当であった時（2002年度）に創刊されたと記憶しておりますが、それ以来、学生と卒業生との情報交換に利用されております。電子メールアドレスをお持ちでない会員の方を含め約700名に毎年お送りしております。
- (9) 工大祭オープンキャンパスにおける研究室開放：例年、工大祭に於いて応用化学コースの研究室を開放し、一般参加者に研究内容の紹介や簡単な実験を行っており、10月23日、24日の開催に向けて田中浩士会計担当（准教授）が中心となり準備が進められております。今年は実験内容を多様化する目的で高木ヤスオ副会長が窓口となりクラリカ（蔵前理科教室）に協力をお願いして「レモン電池」の実験を8回（各回10名の参加者を予定）実施することとなっております。
- (10) ホームカミングデイ：大学が130年記念行事の一つとして企画しているホームカミングデイ（卒業生に大学の近況を見てもらい学生と交流する）に桜花会としても参加することにしました。窓口は田中浩士会計担当（准教授）で、大学の企画内容が明らかになった時点で対応を考えることになっております。
- (11) 広報：桜花会のホームページに最新情報を掲載していますので是非アクセスしてください。蔵前工業会のホームページとリンクしています。また、会員約300名のメーリングリストにより情報の提供を行っております。
- (12) 事務方の活躍：事務全般を担当していただいた河村彰子さんに感謝申し上げます。また、田村吉隆副会長のご尽力で会員4名（臼井公氏、堤正也氏、星野昭成氏、皆川和夫氏）が交流会と総会、講演会、懇親会などの受付、会場設営、写真撮影などにご協力を頂き感謝いたします。

聞くとところによると応用化学コース学生の偏差値はトップクラスだそうで、社会に優秀な人材を送り出すことができるのはその同窓会を預かる一人として誇りに思い

ます。また、実際に、多くの卒業生が企業の重要なポストで活躍されており、同窓会組織の重要性を痛感しております。

会長就任後 1 年半を経過しました。上述したように、この間、役員各位、先生方、会員各位並びに関係者の方々の絶大なるご支援ご協力により活動が維持できたことに対し、衷心より感謝いたすとともに、今後ともよろしくご支援ご鞭撻をお願いいたします。

新任教員挨拶

■■大友 明 教授 (2009年11月 東北大学金属材料研究所より移動)

11月1日付着任しました大友です。どうぞよろしくお願いたします。私は、1991年に2類に入学し、当時石川台にあった無機材料工学科で3年次まで学びました。この間、体育会ヨット部で活動し、年間の半分は合宿所に寝泊まりという生活を送っていました。4年次から修士課程修了まで応セラ研の鯉沼研究室(総理工材料科学専攻)で研究指導を受け、2000年に物質科学創造専攻川崎研究室で博士課程を修了しました。米国東岸のベル研究所に2年間留学し、帰国後東北大学金属材料研究所に移った川崎研究室で8年余り助教を務めました。したがいまして、大岡山にほぼ10年ぶりに戻ったこととなります。装い新たな南1号館とともに何もかもが新鮮に感じられる毎日です。着任後、和田専攻長をはじめ応用化学専攻の多くの方々のご協力により、速やかに研究室を立ち上げることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

「桜花会」という機智に富んだ名前を聞いたとき、すぐに東工大学生応援歌「桜花散り敷く丘」を連想しました。【一番】桜花散り敷く丘の上 胸に誠の若人が 究理の扉開かんと 眉高うして集い来ぬ ああわが大岡山大岡山♪(中略)【六番】朝の洋(うみ)の静寂が 怒濤の夕となりぬとも 強さ啓示(さとし)を両翼に いざ翔け 虚空至理の道 ああわが大岡山大岡山♪インカレースの度に相模湾に向かって歌ったので、今でもよく覚えています。遅れがちな学業を限られた登校日に挽回しながら何とか留年は免れるといった具合でしたが、充実した日々でした。ところが、部活動引退後有り余る体力をどこに向けてよいか分からなくなりました。さんざん悩み諸先輩に相談した挙句、同期の間で体育会研究室として畏れられていた鯉沼研究室にお世話になることにしました。

高温超伝導銅酸化物のジョセフソントンネル接合形成という極めて難しいテーマの見習いとして卒研を開始しました。高温超伝導発見から8年経過した当時でも、超高速スイッチング素子として機能するための根幹である接合部分が未完成でした。これは、四元の複酸化物薄膜を僅か数ナノメートルの厚みの絶縁層を介して積層した構造であり、薄膜表面・接合界面が原子レベルで平坦でないトンネル電流が流れる前にすぐショートしてしまいます。結局、忍耐と修練が足りずそのようなデバイス構造を得るには至りませんでした。その後の研究方針を大きく左右するテーマだったと言えます。

修士1年になると、当時助手だった川崎先生が理研の光物性チームと共同研究していた酸化亜鉛のテーマにつきました。酸化亜鉛薄膜が特定の厚さになると巨大な非線形光学効果が発現するという物性理論の検証を行うため、平滑で結晶性の高い薄膜作りを目指して実験を開始しました。1年ほど経ったある日、共同研究先から驚くべきニュースが入りました。室温下で光励起した酸化亜鉛薄膜から強烈な紫外レーザー光が出ているということです。当初の目論見とは異なるものの、励起子の再結合による室温レーザー発振だとすると極めて高効率の紫外光源に応用できるため、関係者全員が色め

き立ちましたが、やはりその通りでした。

このときを境に2つのテーマが自然に走り出しました。ひとつは、酸化亜鉛の結晶構造を保ったままバンドギャップを制御できる混晶材料とそれを用いた量子井戸構造の開発、もうひとつは、p型酸化亜鉛の合成です。これらが同時に達成されて初めて高効率紫外発光ダイオードが実現できます。前者は私の学位論文につながり、後者は2004年の助手時代に東北大で達成されました。これらの要素技術を基に企業と共同研究を進め、最近ようやく実用レベルのデバイス開発に成功しました。固体照明技術として今後の発展が楽しみです。

上記の研究から得た教訓は、たとえ泥臭いアプローチでも世界で最も質の高い試料を合成すれば、物理研究者がこぞって評価にまわり、思いもよらない発見や展開につながりうるということです。留学先のベル研では、輝かしい研究史を築きあげてきた材料物理部門でどっぷり物理につかりました。ここでも、材料化学にこだわって原子レベルで平坦な界面構造を追及した結果、透明で電気を流さない絶縁体を接合した界面が金属伝導を示す特異現象を発見することができました。二次元面に閉じ込められた電子が高速で移動することを利用した透明半導体デバイスへの応用が期待されています。

応援歌の如く“胸に誠の若人が応化の丘の上に集い”、“強き啓示を両翼に虚空至理の道を翔ける”人材がたくさん育ち、いつの日か「応化の大岡山」と呼ばれることを目標に、今後も研究・教育に邁進する所存です。

■■榎木 啓人 助教 (2009年10月着任)

昨年10月に碓屋桑田研究室(触媒反応設計分野)の助教として着任しました榎木啓人と申します。98年にJSTの戦略的基礎研究推進事業の研究員として採用されて以降、これまで碓屋先生のもとで超臨界二酸化炭素を使った合成反応や分子触媒開発の研究に携わってきました。

私は早稲田大学で山本明夫先生、清水功雄先生のご指導により、パラジウムをはじめとする10族元素のカチオン性有機金属錯体の反応化学を研究し、97年に博士後期課程を修了しました。両先生ともに本学応用化学専攻に所縁があり、私が卒業研究配属を受けたときは、山本先生は東工大資源化学研究所を定年退官されて早稲田大学に移られたばかりでした。山本先生の事務机とわれわれの実験台を詰め込んだ狭い(いわゆる1単位の)部屋で、東工大から持ってきたガラス器具を使って合成実験をしたことは懐かしい思い出です。早稲田においても資源研での研究を引き継ぎ、空気や熱に不安定な有機金属錯体を合成し、その性質を調べることによって均一系触媒反応の素反応過程を解明することが中心的なテーマでした。資源研時代から、大切に作った錯体を次々と分解させる山本研究室の研究手法を「壊し屋」と揶揄する人がいたと耳にしますが、そうした「壊し屋」が触媒メカニズムを明らかにして得た知見を積み重ねることで、新たな触媒を合理的に構築する術を身につけ、触媒反応設計という概念が学問的に確立したと私は理解しています。

「壊し屋」というと、次々と新しい政党を立ち上げては解党してきた氏を思い浮か

べる方も多いと思いますが、私のこれまでの実験室の設営・移転の経験を考えると「壊し屋」の側面があるかもしれません（決して「豪腕」ではありませんが）。その数は早稲田の頃に4回、東工大で5回にのぼります。まさに立ち上げては壊し、次に立ち上げては引越しという繰り返しでした。今年中に南1号館（旧北棟）の改修に伴う移転作業が完了する予定であり、再び実験室新設の機会がやってきました。これまでの経験を活かし、効率的な研究環境を実現できるようにしたいと考えています。

研究面でも、引き続き不斉触媒反応や二酸化炭素固定に関連する研究を推進し、これまで分解の憂き目にあった金属錯体に成仏してもらえそうな分子触媒系の開発をめざしたいと思います。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

■ ■ 米谷 真人 助教（2010年2月着任）

このたび2月16日に和田研究室に助教として着任いたしました。よろしくお願い申し上げます。私は1999年に大阪市立大学の工学部にて機械工学を修学する傍ら、分子を操る化学に魅せられ、大阪大学の工学研究科物質・生命工学専攻の柳田研究室の門をたたきました。当時、安全ピペットの使い方も知らない化学のド素人でしたが、研究室の指導教官ならびに先輩方の熱心なご指導により、有機金属錯体合成から始まり、光電気化学と無機合成に挑戦しながら、当時、新エネルギーとして新たな潮流にあった色素像感型太陽電池の研究に2年間没頭しました。修士修了後、2001年にシャープ株式会社の生産技術開発推進本部にて、革新的液晶生産技術の創出と開発から工場への導入、さらには特許戦略によるブラックボックス化を進める中核部門にて仕事に携わりました。当時爆発的に拡大していた液晶ディスプレイ分野において、他のアジア勢力に対して圧倒的な技術的優位を確保することを任務に、最先端の液晶生産技術の萌芽研究から技術開発を経てCGシリコン液晶プロセスや、亀山工場の生産現場への導入に携わり、実戦を通して鍛えられるという幸運に恵まれました。3年の期間を経て、プロジェクトリーダーとしての確かな専門分野と知識を得ること、さらには、研究者として自分の専門を確実な英語で世界の誰とでも本気で議論できるようになるため、長年親しんだ職を辞して博士課程学生として渡米する決意をしました。その後2004年からの5年半、博士課程学生として、ペンシルバニア州立大学物質科学工学専攻のDavid Allara研究室に所属し、自己集合膜を用いた有機-金属界面での分子と電子の挙動解析と分子デバイスへの応用の研究に携わりました。言語だけでなく、風習、習慣、仕事手法や、アイデア抽出方法など、全てが日本と異なる環境で、アメリカ人のみならず世界からやってきた様々な研究者と垣根を越えて交わる中で新しい思考の機軸を得るとともに、さらには、それでも変わらない研究者としてあるいは人として本来のあるべき誠実さに触れ、大きく自分が変わり、掛け替えのない仲間も得た5年半でした。また途中、客員研究員として西海岸のシリコンバレイにあるヒューレットパッカード研究所で過ごした8ヶ月は、保守的な東海岸のペンシルバニアとはまた違った貴重な体験となりました。大らかでオープンなシリコンバレイの風に吹かれ、外部内部の分け隔てのない世界最高峰レベルの研究者との白熱した議論は、自分の凝

り固まった頭を解し、また自分の井の中の蛙さ加減を改めて気づかしてくれ、新しい発見の詰まった貴重な日々でした。2009年12月に学位を取得し、次のステップアップへの新たな場所として、東京工業大学応用化学専攻にやって参りました。東京工業大学に所属するのはもちろん、学生を指導することや、東京に住むことも人生で初めての経験です。されど、「変化はチャンス」。「CHANGE」は「CHANCE」と「T」から成ると言います。「チャンス」と「Timing」？「Thoughts」？「Temperature」？あるいは「Threats」？それとも「Tomodachi」？新しい土地と新しい環境で新しい研究分野に、自分自身の色を織り交ぜて、また新しい変化を自分自身と周囲に生み出して行きたいと考えています。現在は、光エネルギー変換を目的とした有機-無機ハイブリッドナノ材料系の構築と界面現象の解析を課題に、さらに自分本来の専門である表面界面化学的アイデアを織り交ぜ、界面での電子移動制御により高効率な光エネルギー変換材料を創出することを目標とし、研究に学生の指導に尽力したいと思います。5年、10年先、あるいは我々の子供の世代において、環境と人がより調和したエネルギー社会を迎えている中で、研究成果がその一助に成っているよう日々努力したいと考えます。

まだまだ不慣れなことが多くお力をお借りすることも多々ありますが、今後とも暖かくも厳しいご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

■■大島 孝仁 助教 (2010年4月着任)

4月1日付けで助教に着任いたしました大島孝仁と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、京都大学工学研究科 電子工学専攻にて、化合物半導体材料分野で活躍されておられる藤田静雄教授のご指導を賜り、昨年度学位を取得しました。スタッフがお忙しい藤田教授のみという小規模な研究室ゆえに、学生であっても主体的に行動しなければならず、他研究室の学生では得られない特殊で貴重な経験をさせていただきました。

本年度からは上京し、東京工業大学 応用化学専攻 大友明教授が主宰される研究室に採用して頂きました。教授は無機酸化物材料分野における新進気鋭の偉才であり、共に研究できることは光栄であると思っております。そして、まさにこの春、教員、学生、部屋、何もかもが新しいという稀有な状況から、本研究室は活動を開始しました。現在は事務手続き、各種装置立ち上げなどを行っている段階ではありますが、少しずつ研究体制を確立しております。

本研究室では、主に無機酸化物単結晶や薄膜を対象とした研究を行います。また無機酸化物と有機材料を組み合わせるといった新たな挑戦も試みます。私自身は、酸化物薄膜の合成を行い、その薄膜の機能材料としてのポテンシャルを発揮させ、どうにかして世の中に役立てられないかと思案しております。この酸化物薄膜の分野は、近年急速に拡大しており、新たなアイデアが次々と提案され、多種多様な研究が生まれています。その中で存在感を示すことは困難ではありますが、非常にやりがいがあります。将来的には多くの研究者に支持される研究を行い、その研究を通じて多くの人々の生活を豊かにしたいと考えています。

さて、着任から二ヶ月が経過し、本学の雰囲気は徐々にではありますが伝わってきました。本学で過ごして思うことは、学生の勤勉さと教員の学生に対する強い熱意です。高い授業出席率、低い留年率、懇切丁寧な指導、先生方の綿密な連携は、私がこれまであまり見たことがないものであり、戸惑いと感銘を憶えました。まだ応用化学専攻の先生方と面識があるだけですが、皆様学生のことを真剣に考える尊敬に値する方々ばかりで恐縮しております。日本有数の自由放任主義の大学に所属していたせいも、この文化の違いは新鮮に感じられました。郷に入っては郷に従えということで、教員の立場から学生を大切に育てる文化を受け入れ実践したいと思います。

最後になりましたが、本学に赴任し敷地内に足を踏み入れたとき、本館正面の桜が美しく咲いておりました。毎年この桜を觀賞することができるのはなんと素晴らしいことでしょうか。学生、教員、場所に恵まれたこの環境で研究できることはこの上ない喜びであります。まだ、右も左も分からぬ若輩者で、不慣れなことも多いですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

研究室紹介（碓屋・桑田研究室）

碓屋・桑田研究室には現在、碓屋隆雄教授、桑田繁樹准教授、榎木啓人助教、補佐員の神戸典子さんに加えて、学生 19 名が在籍しています。内訳は博士課程 2 名、修士課程 12 名、学部 4 年生 5 名（うち女子学生 7 名、留学生 2 名）です。

研究室は昨年（2009 年）新築なった東 2 号館へと引っ越したばかりです。東 2 号館では景観のよい最上階（6 階）の全体と 5 階の一部を占めており、西には富士山、また北へ目を転じれば東京タワーに新宿副都心、また最近話題の東京スカイツリーも見渡すことができます。また景観だけではなく、居室と分離された学生実験室や、アルゴン、窒素ガスの集中配管設備など、安全で快適な研究環境が実現されました。惜しむらくは、すぐ間近に見え、応用化学専攻の研究室も入居している南 1 号館や本館へ行こうとしても、一度地上へ降りて、建物を移らなくてはならないところです。研究の視野を広げ、また専攻を円滑に運営するために、研究室内でのコミュニケーションだけではなく研究室間の交流の機会を積極的に増やす必要を感じています。

研究面では、研究室の発足以来、一貫して、原子・分子レベルでの精緻な構造制御に基づき、高効率、高選択的で真に実用的な反応を可能にする分子触媒、ならびに超臨界二酸化炭素を媒体とする反応の開発に取り組んできました。とくに 2006 年度から 2009 年度まで、全国から 80 名強の研究者が参集した文部科学省科研費特定領域研究「協奏機能触媒」の代表として、研究を強力に推進し、多くの成果を上げることができました。このように、新たな研究領域を開拓する方向性が研究成果とともに評価された結果、碓屋教授が平成 21 年度の日本化学会賞を受賞しました。研究室一同にとっても嬉しいニュースです。今後は、これまでの研究成果を基盤として、とくに、水素、酸素、二酸化炭素、水、窒素など、われわれの身の回りに豊富に存在する小分子を、エネルギー源、あるいは炭素、酸素、窒素原子源として有効活用する技術開発への展開を目指しているところです。また、博士課程 3 年生の長谷川康晴君（日本学術振興会特別研究員）が、この 7 月に台湾で開催された有機金属化学国際会議でポスター賞を受賞するなど、学生も頑張っています。世界を舞台に活躍できる学生を育成できるよう、研究活動を通じた教育にも力を入れていきたいと考えています。



卒業生から

■ 垣間見た中国技術の20年

伊澤 禎一

昭和34年卒業、(岩倉研究室)

約20年の間中国の技術者達に接して垣間見た経験を書いてみます。鄧小平氏による改革開放から10余年を経過した1990年代初頭から訪中して感じている技術者の態度や考え方の変化を記します。中国をみる時の皆様方の参考として少しでも役立てば幸いです。

初期には、必ず組織のトップが出てきて「日本からの先生にぜひ教えて戴きたい」と口で話された後で、「自分たちが知っていると呼ぶこと」を次々に述べました。これを演説と呼んでいました。教えて欲しい点の説明がその次に出て来るのですが、現場的な問題であっても本当の現象は全く見ていません。こちらの質問に答えられなくて部下を呼んでもその人さえが現物に接して居らず実情を掴んでいない有様でした。私の方が、何回も「現物を見せてくれ」と言うものですから徐々に現場説明をするようになって来ました。95年頃から流石に演説は少なくなりましたが、三現主義には程遠い状況で問題の本質を聞くまでにかかなりの手間ひまが必要でした。そうした中で先方から本当に教わりたい、役立てたいと考えていることが少しずつ出してくる様になって手ごたえを感じました。

21世紀に入ると中国側のトップの若返りが急速に進みました。旧来の国営企業の体質を受け継いでいるグループでも、演説なしに本題に入れるようになりました。更に私営企業を取り仕切る技術のトップが直接出てくると、自分でも技術指導しているという実感が持てました。出席者が上下の別なくチームとして皆で聴くという職場の感じがはっきり見える様にもなりました。それでも本質的に持っている中華思想はチラチラと見えて来ます。05年以降になって、中国人だけで生産に関する技術を組み上げ、自分たちの工場を立ち上げて製造に結びつける場面に立ち会うことが何回も出てきました。

この変化を感じさせる人材の差は、「文化大革命」の前と後での人々の考え方が大きく変わって来たことに依ります。大革命期終了まで(77年以前)は、所謂、国に全てを任せるというタイプでした。文化大革命の始まる66年までに大学を卒業した人々の殆んどに「頭の固さ」と「全てに国丸抱え」という考えが残っていました。中国では、現在50才に近づいている文革後世代の前に約20年間の人材欠落時代があったこととなります。改革開放の78年以降に大学に入学した世代からは「タテマエ」に支配されない軟らかさを持つ技術者、経営者が輩出され、先進国を追いかけるという期待も大きくなっています。

これら変化の見える中国の技術者の挙動の中で次の二点には変わらない状態が今後も長く続くと思います。その第一は、訪問の初期からはっきりと中国人が断言していて未だに言い続けている「形があるものは必ず作れる。すなわち真似できるから偽

物は直ぐにでも出回る」ということです。第二は、殆んど同じ意味と考えられますが「形の無いもの（例として知的財産権など）には金を払わない」というものです。私の実感なので独断かも知れませんが、どんな場面でも中国人は中国人に物事を教えなという傾向がはっきりしています。もっと強く言えば、上の方が部下に物事を教えることを拒否する場面もしばしば目にします。中国の会社内では技術の伝承と言うような事ほとんど期待できません。日本など先進工業国からの技術導入で工場が動いたとしても、中国人がそれを基に第二工場を建設して稼働させることは当分の間は考えられません。

中国中央政府が政策として目指す次の10年間の計画が具体的に見えてきています。技術先進国で活躍している中国人科学者・技術者が母国に貢献する場合への支援を大幅に強化するという明白な変化です。すでに帰国して活動している若手技術者へのアメとムチも感じられます。2010年になって私の知っている先端技術者達にも顕著な動きが見られます。欧米で事業を起こした人材の帰国が勧められており、日本からも現場を知る人達の移動があります。日本企業を工場ごと、或いは人材ごと手に入れる中国資本にも注意が要ります。政府方針を感度良く観察しながら対応してゆくことが必要不可欠なことだと思います。

■ 技と力

秦野 正治（日産自動車株式会社）

昭和57年卒業応化コース 昭和59年修士 昭和63年博士（森川・大塚研究室）

私は縁あって、毎年非常勤講師として東工大に足を運んでいますので、大多数の卒業生の方に比べれば、東工大との係わりを強く感じられている方だと思います。しかしながら、忙しさもあってか、日頃「自分は東工大の卒業生なんだ。」とか「学生時代自分はこうだったなあ」などということ意識することはほとんどないのが実情です。そんな私が「桜花会誌に原稿を」と依頼されたときに、はたと困ってしまいました。そこで、何年かぶりに「自分が東工大時代にどんなことを考えていたかなあ」ということから考え始めました。

東工大時代といっても、研究室に所属した学部4年生から助手として採用していただいていた期間の、研究に没頭していた時期（これには異論がある方もいらっしゃるかもしれませんが）のことです。「良い研究をしよう」（恥ずかしながらこのあたりも若いころはあまりにも漠然としていましたが）という意識は当然ありましたが、その組織論までは意識したことはありませんでした。逆に今は研究チーム、部署、会社が組織としてどういう風に力を発揮していけばいいのか、そんなことを良く考えます（考えさせられます、というのが正解かもしれません。）東工大時代と現在の自分を比較してみて明確に違う部分だと思います。

時々不思議に感じるのですが、自分が現在担当している業務というのは、世界と戦うことなのです。しかも金メダルを狙おうとしている・・・。その辺りにいるただのおじさんが、そんな大それたことに関わっているというのは、たいへん違和感がある

のですが、もちろんそれは戦っているのが私個人ではなくて、組織が世界に戦いを挑んでいるという図式の中に、たまたま私が組み込まれているということです。個人の力というのは本当に限られているにも係わらず、それが組織となった場合にとてつもない力を発揮できる、その理論についての理解があるわけではありませんが、組織の創り方によって結果の成否が左右されるというのは実感としています。

ただ、その組織というのは部署単位、会社単位でクローズしてしまうと、これまたそこに限界が生まれてしまいます。そもそも個人の能力には大きな差があるわけではなく、結局その個人の集合体である組織も、行き着くところはどの組織も大差がなく、成熟した業界であればあるほど、その競争力もトントンになる、というあまりうれしくない現実直面してしまうこととなります。そうする次なる手は既存の組織の枠を超えたコラボレーションということになるわけです。似たような組織が協業したとしても、1足す1は2にしかならないので、ひとつの考え方として、文化の違う海外機関とのコラボレーションによって、それぞれの強みを結集し、より高い成果を上げよう、そしてライバルに打ち勝とう、という動きがあります。これも、誰しも考えることなので、行き着く先は・・・、ときりがない話になってきますが、この手の競争スパイラルから離脱し、「そこそこでいいです。」というような処世術もないことはないと思いますが、それですとここで話が終わってしまいますので、そのことはいったん忘れましょう。

私は会社の中で研究所と呼ばれる組織に所属していて、実際に業務内容もかなり研究寄りになっています。大学時代は、研究室のトップである教授、助教授（当時の呼び名ですが）のもとで研究を行っていて、基本的には外部の研究室とのコラボレーションということを考えてことはありませんでした。企業における研究というのは少し事情が違ってきます。大学における研究には先進性、独創性が強く求められるのに対して、メーカーにおける研究ではそういった観点は無視できないものの、製品開発において鼻差でもいいから他社に競り勝つこと、への貢献が強く求められるという事情によるのだと思います。各機関の強みを結集して、より効果的に研究成果を生み出していく戦略が求められます。今の社会はそんな状況ですから、私も研究コラボレーター探索、関係構築のために先進国から新興国まで海外に出張することが多くなりました。それはそれで粛々と進めていくのですが、そういった状況の中である思いが芽生え始めました。「自分たちのアイデンティティはなんだろうか？」

海外研究機関とのコラボレーションは、開始前の契約案文の調整の煩わしさを乗り越えてしまえば、刺激も多く楽しいことがほとんどなのですが、自分たちのアイデンティティをきちんと持っていないと「まずいことになるのでは？」と懸念も持つこともあります。共同研究の結果、ノウハウや労働力は提供したけど、それらを吸収した相手側が成長し、結局自分たちのところには思い出しか残りませんでした、そして自分たちは必要とされなくなりました、・・・「最悪そんなことになりかねないのではないだろうか？」

日本に比べると、海外における研究への投資の判断の早さ、投資規模の大きさに驚かされることが多々あります。日本人的には、「まずは始めてみて、うまくいきそうになったら規模を拡大しましょう。」といった流れがまっとうだと考えるのだと思う

のですが、思い切りが違うのです。極端な話、日本の NEDO がある分野に 10 億円の投資をする、というニュースを聞いて、「それじゃあこっちは 20 億円だ」とそんなノリで、話が進んでしまうようなお国柄の国もあるようです。そんなやり方が必ずしも良い結果を生み出さないことは皆さんの経験からもよくご存知だとは思いますが、大化けする可能性を否定することは難しく、脅威といえど脅威です。私の経験上、こういった観点から海外と日本が争うのは、行政にしても私企業にしても、基本的にガラではないと思っています。それでも悲観はしているわけではありません。日本人技術者には大きな武器があると思っています。

そう簡単にお金で買えないのが“技”なのではないでしょうか。本格的な開発にまでなると投資規模は重要な要素となってくると思いますが、“研究”という分野においては、その良し悪しを決めるのは必ずしも投入する予算で決められるものではありません。“力”だけでは得られ難いものがあるはずで、質の高い、信頼性の高いデータを取得するための、試料調製技術、試料前処理技術、測定用治具設計・作成技術、実験プロセス制御技術、実験室環境管理技術等々、これらの“技”は高額な研究設備を導入したからといって自動的についてくるものではありません。一見地味な作業なのですが、研究の基本中の基本だと思います。日本人の技術者はこれらのスキルが非常に高いように感じています。手先が器用なこともあるでしょうが、目標に向かって手を抜かずに最善を尽くす、苦勞は買ってでもする、努力は人を裏切らないと信じる、多分に偏見も含まれると思いますが、日本人のこのような気質（実は必ずしもいい面ばかりではありませんが・・・）も影響しているいかもかもしれません。本来ならこれができるないと意味のある仕事にならないはずのものです。チャンピオンデータを争ったり、上司に派手なパフォーマンスを示したりするためには、必ずしも必要ではないかもしれませんが（これも社会で生き抜くためには必要なことですが）、当たり前前にできていなければならないことですし、世界の競争の中でわれわれが勝ち抜いていくためにはぜひとも持ち続けたいアイデンティティです。もちろんここで外国人技術者を低く見ているつもりも、海外の技術を甘く見るつもりもまったくありません。日本人にはない“力”強さはうらやましくもあります。だからこそ、文化の違いを超えたコラボレーションには大きな可能性があるのだと思います。

■ ■ 偶然の出会いを大切に

田中 理恵子 （協和発酵キリン株式会社）
平成 5 年応化コース 平成 7 年修士（山本研究室）

私が東工大に入学した当時、女子学生は全校生の 3% 程度、周りは選りすぐりの才能（個性？）あふれる女性たちばかりでした。家から一番近い大学に記念受験し、まぐれで入学してしまった平々凡々な私は、気後れしつつも、刺激を沢山受け、実り多い学生時代を過ごすことができました。その後、自然/生命現象を化学の目を持って見つめていきたい、という思いから、応化コースに進学。山本・高橋研究室に所属し、遷移金属触媒化学の勉強をさせていただきました。山本經二先生には、じっくり観察

し、思考の軸をぶらさず、粘り強くとことん考え抜くことを教えられたように感じています。また、劣等感に押しつぶされそうになったとき、先輩の“人より能力が劣ると思うなら、人より沢山実験し、沢山汗をかけばよい。”という言葉に救われ、卒業研究に昼夜打ち込んだのも、今では懐かしい思い出です。恩師と当時の研究室の皆さんには本当に感謝の言葉もありません。この研究室での3年間は、今でも自分の基盤となっていることを強く感じています。

1995年、協和発酵工業（株）に入社、以来現在に至るまで、憧れていた創薬研究の仕事に携わっております。それは、今も仕事を続けていられるのが奇跡だと思えるくらい、綱渡りの日々の始まりでした。長男を身籠ってすぐ、わずか3カ月で切迫流産のため入院、出産までドクターストップにより休職。出産後も保育園の送り迎えと遠距離通勤で会社にいる時間は文字通り半減しました。長男は喘息持ちで体が弱く、有給休暇が足りなくなって、欠勤が続いたりもしました。子どもは“保育園に行きたくない”と泣きじゃくるし、会社には迷惑のかけっぱなしで、いたたまれず転職を本気で考えはじめたころ、転勤の内示。ついに遠距離通勤から解放され、少し余裕が持てるようになりました。

その後、会社の買収が公知となり、俄然研究所内は騒がしくなりました。私自身は、長男が小学校にあがり、一息ついたのもつかの間、くじ引きで大当たり～、町内会子ども会の会長になってしまい・・・当初は、あみだくじ恐怖症になるほどのショックを受けましたが、いざ活動してみると、地域の、世代を超えた人々との交わりと子ども達の好奇心溢れる瞳から、沢山のことを教えられました。娘はまだ2歳になったばかり、公私ともに余裕のない毎日で、家族には大変迷惑をかけましたが、貴重な体験をさせていただいたこと、今では心から感謝しています。

そんなわけで、地域奉仕活動に興味をもった私は、多少無理しつつも社内ボランティアによる出張授業（小学生対象の理科実験）に数回参加させていただきました。自分の細胞を顕微鏡で観察したりDNAモデルをペーパークラフトで作成したり、なんでもない授業なのですが、子ども達は大喜び。心から実験を楽しんでいる様子を見ると、“このなかに、世界を舞台に活躍するような科学者の卵がいるんじゃないかなあ・・・”と楽しい想像が膨らんでしまいました。

そして、この4月、会社は協和発酵キリン（株）として一丸となつての再出発を果たしました。私自身も、合成以外の新しい分野に挑戦する機会を与えられました。当初は、十年以上合成をやってきたのに、なぜ今更別の分野～っ！とふてくされたりもしました。研究をやめようかと思ったことも・・・でも、ふと振り返ると、これまで、仕事でも人でも偶然の出会いが、自分の大事なポイントになっていることに、改めて気づき・・・自分から研究をあきらめたくない。心機一転、最近では小さな発見に日々心躍らせながら、一からの再出発を心から楽しんでいます。

娘はやっと3歳になったばかり、まだまだ分刻みの綱渡り生活が続きそうですが、失敗は転機、ピンチはチャンスと開き直って、何事にもあきらめず、そして、仕事でも人でも偶然の出会いを大切に、生きていきたいと思っています。

同窓会報告

■ 第3回昭和48年入学3類同期会報告

三上 幸一（応用化学専攻 教授）

今回は日時、会場設定、案内、出欠集計など伊東主幹事にほとんどやっていただきました。改めて感謝申し上げます。本3類同期会（昭和48年入学）は、学部卒業時に恩師をお招きして本館の職員食堂（現1食）で謝恩会を開催した折に、「10年ごとに同期会をやろう」という約束をし、継続してきたものです。

第1回は、新橋の旧蔵前工業会館で今は亡き北島信正氏も参加されました。報告記事は蔵前工業会誌に依頼を受けて、書いたように記憶しています。北島氏が「ちょうど子供が生まれたばかりなのに、レントゲン検査で引っ掛かって心配だ」と言っていたのを昨日のように思い出します。それから、彼の闘病と研究の戦いが始まり、何回か間欠的に入院する慶応病院に見舞いに行きながら、「このまま、だましまし行けるといいんだけど」という彼の言葉に、「こうやってうまくきているんだから」と本当に心から願ったものでした。それなのに私が息子のボーイスカウトでの新年の餅つきをやっている最中に、「その病気」でなく、出張先で風邪を拗らせて亡くなるという訃報を受けるという残念な結果になってしまいました。

第2回は、それから約10年、100周年記念館の第一会議室で行いました。ちょうど桜花会の庶務幹事の高橋孝志教授が蔵前工業会とタイアップして同窓会名簿を整理されていらしたこともあり、高橋先生の依頼を受けて、3類同期会（昭和48年入学）名簿を作成しました。我々の入学当時は南ベトナムの首都サイゴン（現ホーチミン市）陥落後で同期にはベトナムからの留学生が多く、その多くが博士課程にも進学しました。そのうちカオ・ミン・タイ氏が当日の同期会に参加されました。「みんなとの学生時代は良い思い出で、そこで学んだガッツを生かして東芝で頑張っています」と、今や重責を担う社内での仕事を紹介してくれました。母国ベトナムに戻って、政府の中核で偉くなって活躍している友達や、アメリカやオーストラリアで活躍している同期もいますが、そうして日本に根を張って活躍している留学生の友達の話はともうれしいものでした。第2回同期会の報告記事は高橋先生の依頼を受けて、当時まだ桜花会誌は発刊されておらず、蔵前工業会誌に書いたと思います。

そしてさらに約10年後の本第3回が昨年11月20日におこなわれました。その1年ほど前から3類同期会幹事と有志数名、さらに2類の鞠谷雄士教授や4類経営工学科の飯島淳一教授と拡大同期会の準備会と称して飲み会を持ち、連絡網の再確認、時期を大まかに打ち合わせました。しかしながら短い準備期間等もあり、今回も3類に限定した同期会となり、当日を迎えました（下記参加者名簿）。会場はできあがったばかりのTokyo Tech Front内の手島精一記念会議室で開かれました。ちょうど本館から真正面にあたり、本館のライトアップが美しく、まさに同期会にふさわしい会場でした。まず、伊東主幹事から、幹事を代表して挨拶、そして化学工学科、合成化学科、電気

化学科を横断した教育と研究のDynamismをと、我々を第1期生として出発した大化学工学科の発足当時の学科構成、職員の名簿、恩師の写真がPPT（添付）で紹介されました。その後、現在の仕事等を改めての自己紹介を兼ねてお話いただきました。所長、センター長、執行役員や社長になられた方がたくさんいらして、皆責任のある立場と年齢になったと改めて痛感しました。最後に亡くなった石田浩、吉田、北島、宮沢氏を追悼するとともに、危篤とまで言われて心配をした同期の仲間が、完全に回復したという喜ばしいNEWSを紹介し、なにより健康に気をつけなければなければならない年齢になったことに注意を喚起しつつ、同期のNetWorkを生かして協力し、時には叱咤激励して頑張っていこうと次回の再会を約束してお開きとしました。その後、多くが二次会と一緒に流れて、「年齢が年齢だけに毎年でも時期を決めてやろう」という提案に皆熱く盛り上がりました。

「今後案内、出欠などはメール連絡を主とすれば応答が早いので、同期会も開き易くなったのでは」、とは伊東主幹事の言葉です。他の年代も横のNetWorkを拡げて、弱いといわれている東工大（蔵前さらに桜花）同窓会の絆と力を強くしていけたらと思う次第です。

参加者名簿（下線は3類同期会主幹事）

（高分子）中山克彦（Victrex Japan）、小城義尚（大日精化）野島修一（東工大有機高分子専攻）

（応化）見玉宏之（ニコン光ガラス）、山下清俊（東邦化学研究所）、百瀬隆（ダイセル化学）、田中公章（日本ゼオン）、山川富雄（日本ケミファ）、瀬戸井宏行

（アステラス製薬）、布川 治（エルゼビアジャパン）三上幸一（東工大応化専攻）、和田雄二（東工大応化専攻）、鈴木榮一（東工大応化専攻）、

（化工）中村守孝（千代田化工）、山田和夫（東芝）、大橋邦祥（キャンベルジャパン）、伊東章 東工大化工専攻



昭和48年入学直後の新入生セミナー 銚子市1泊：初めて酒を飲んだ新入生も多かった一方、なかには酒豪もかなりいた。新入生セミナーでお酒の出る古き良き時代

最近の大学から

■ 2010 年度は？

応用化学専攻 専攻長 和田 雄二

専攻長として、二年目を迎えました。桜花会会誌では、専攻長が、毎年、専攻の状況をお伝えしてゆくことにしたいと思っております。今年度の状況をお伝えします。

応用化学専攻から巣立った学生

平成 21 年度 3 月には、博士前期課程（修士）23 名ならびに博士後期課程（博士）5 名を社会に送り出しました。就職活動が厳しい中ですが、教育・研究、化学系メーカー、電気系、製薬会社、材料メーカーなど、多様な社会貢献への道を歩み始めています。

化学工学科応用化学コースと応用化学専攻

平成 22 年度の化学工学科応用化学コースには、2 年生 38 名、3 年生 44 名、4 年生 37（39 名（仮配属含める））名の学生が所属しています。大学院理工学研究科応用化学専攻では、博士前期課程（修士）1 年 29 名、2 年 30 名、博士後期課程（博士）16 名の学生たちが学んでいます。学部の応化コース学生に比較して、大学院博士前期課程定員は、7 割程度に絞られますが、ほとんど全員が大学進学を希望しますので、応用化学専攻以外にも長津田キャンパス総合理工学研究科の化学環境学専攻、物質電子化学専攻等にも進学していきます。

御苦労さま、そして新しい教員が着任

長い間、学部学生教育を中心に、特に学生実験の運営に携わっていただき応用化学系を縁の下から支えて頂いた中森建夫先生が定年でご退職になりました。今までのご貢献に心からお礼を申し上げます。わたしだけでなく、学生実験で中森さんに怒られたり、励まされたり、すんでのレポート提出受理で救われた方々は少なくないでしょう。

昨年 11 月には、無機合成化学分野の教授として大友先生に着任頂き、大友研究室が立ちあがりました。三十代の若手教授として今後の応化専攻の将来を担って頂く期待を寄せています。大島先生、榎木先生、米谷先生の三名の新助教の方々もメンバーとして加わり、教育研究活動をスタートして頂いています。ほとんどフルの人員が揃った状態となりました。

現時点での教員は以下の構成です。

応用化学専攻

有機分子設計分野	高橋孝志教授、田中浩士准教授 布施新一郎助教、飯島悠介助教
無機合成化学分野	大友 明教授、岡本昌樹准教授、大島孝仁助教
触媒反応設計分野	碓屋隆雄教授、桑田繁樹准教授、榎木啓人助教
有機反応設計分野	三上幸一教授、伊藤繁和准教授、相川光介助教
錯体反応設計分野	鈴木寛治教授、高尾俊郎准教授、大石理貴助教
工業物理化学分野	和田雄二教授、山中一郎准教授、望月大助教 米谷真人助教

物質科学専攻

物質変換講座	佐治哲夫教授、鈴木榮一准教授、荻原仁志助教
--------	-----------------------

南 1 号館が改装でりっぱに

昨年度から改装工事中だった南 1 号館がきれいな形で再出発をしました。南 1 号館の西側には、大友研、鈴木高尾研、山中研、佐治研が入居することになります。この会誌が配布される時期には引っ越しも終わっているはずですが、東部は耐震不足との判断で、今はまだ使用中ですが、いずれ取り壊しとなります。

図書館新築中

皆様が長らく親しんでこられた（旧）図書館も、耐震問題のため、もうしばらくの利用となります。現在、本館前ウッドデッキ前に新しい図書館を新築工事中です。今しばらく、その全景を見るにはお待ちいただきたく存じます。

■ ■ 創立 130 年を迎えるに当たり

高橋 孝志（応用化学専攻 教授）

来年度には東京工業大学は創立 130 年を迎えることとなりますが、本学はこの長いあゆみの中で、工学を中心とする分野において世界をリードする概念・技術を次々と創出し、科学の発展に寄与してきました。今回、桜花会誌への寄稿依頼を受けましたので、私が 1976 年、東京工業大学工学部化学工学科の辻二郎先生のもとで助手のポジションを得て本学での研究生活をスタートさせた時から、現在までの化学工学科における講座の変革と、将来起こるかもしれない学科再編成等について、個人的な意見を書かせていただきます。

1973 年、それまで独立に運営されておりました化学工学科、合成工学科、応用電気化学科を統合し、新しい理念を持って誕生した化学工学科は、生命理工学部設置前年（1985 年）の時点で、14 講座（熱化学工学、拡散操作、機械的操作、反応操作、化学装置設計、触媒反応工学、反応速度論、工業物理化学、工業化学基礎、無機工業化学、有機工業化学第一、有機工業化学第二、有機合成化学、電気化学）と 2 つの共

通講座（工業分析化学、基礎化学工学）ならびに共通助手（7名）で構成されていました。1986年から1988年にわたって行われた生命理工学部設置に伴い、本学科からは有機工業化学第一、工業分析化学、基礎化学工学の3講座を生命理工学部へ移し、1989年の時点では、11講座と3類の学生実験担当の共通助手（6名）となりましたが、戦後のベビーブーム時代の親の子供たちが大学入学時期となり、3つの時限講座（反応化学、応用電子化学、精密化学工学）が新設され、生命理工学部設置以前と同じ規模の講座数で学科が運営されていました。この大変革時期に本学科に在籍しておられました相澤先生、大倉先生、小川先生は、その後本学の学長や副学長になられており、化学工学科は大学中枢の人材を生み出す学科でもありました。その後、大学院重点化を間時近に控えた1997年までの間に、化学工学科の教育・運営は化学工学コース、応用化学コースのコース制で行われており、学部授業は各コースの専門性を重要視した内容になってきました。各コースにおける講座は次の通りであります。化学工学コースには5講座（熱化学工学、拡散操作、機械的操作、反応操作、化学装置設計）と1つの時限講座（精密化学工学）、一方、応用化学コースには6講座（触媒反応工学、工業物理化学、無機工業化学、有機工業化学、合成有機化学、分子機能設計）と2つの時限講座（反応化学、応用電子化学）から構成されていました。1999年の大学院重点化に伴い、両コースはそれぞれ化学工学専攻、応用化学専攻となり、別々の専攻になりましたが、学部は化学工学科で運営されております。なお、現在、応用化学専攻は2つの大講座（分子機能設計講座：高橋、碓屋、大友、岡本、桑田、田中；化学反応設計講座：鈴木、和田、三上、中山、高尾、伊藤）から構成されていますが、各大講座内には有機、無機、物理化学でそれぞれ1講座分があります。

化学工学科は有能な化学エンジニアの育成を目的とした学科の成り立ちから、これまでライフサイエンス系の研究分野を持たずに成長してきました。しかしながら、21世紀になり、人類の幸福に寄与するライフサイエンス分野はその重要性をますます増加させております。事実、新入学生の3類特別講義でのアンケートの結果、驚くべきことに「自分は医学や薬学方面の進学希望だったが、成績が今一つ足りないので、応用化学を選んだ」という学生が1/3程もいたとのこと。最近の3類の入学試験でのレベルアップ（4、5類並み）は、こうした学生指向が多少なり反映されているのかもしれませんが、先にも述べたように、本学には本学科から分離・誕生した生命理工学部がありますが、現在、社会から切望されているような医・工融合を目指したライフサイエンス分野は未だ誕生してないことも事実であります。一方、国内他大学の医学・薬学部においては、研究者の養成と並んで、臨床医師、薬剤師の養成も非常に重要な課題となっているため、必ずしも多くの優れた研究者を養成することは容易ではありません。ライフサイエンス分野で未解決のまま残されている課題は、現状の医学、薬学の概念・技術のみでは克服困難なものが多く、工学的技術の積極的な活用、応用が切望されております。すなわちライフサイエンス分野の最先端技術開発を担う優れた研究者の養成が急務であると言えます。本校はもともと医学・薬学部をもたず、有能な学生を集め、一流研究者の養成に専念することが許される環境にあります。この現状を考えますと、もし本学で今後、学科再編成が再び必要とするなら、工学を基盤とする「医療工学研究科」もしくは「創薬工学研究科」といった融合研究科を創設

し、優れたライフサイエンス系研究者の養成に尽力することは非常に意味があることで、今後も工業大学として本学がそのプレゼンスを最大限に発揮する好機なのではないかと最近考えております。

■ ■ 忙中、閑あり…？

高尾 俊郎（応用化学専攻 准教授）

准教授になって早くも2年が経過いたしました。思えば講義の準備に追われる毎日だったような気がします。1回90分の講義を毎週毎週、全14回。大学の先生なら当たり前だよな…って学生の頃は思っておりました。そして最後には期末試験の問題作成。おいおい、試験を受ける方が何倍も楽じゃねえか！大学の先生がこんなに大変な仕事だったなんて、学生の間、いや助教の間も気がつきませんでした（先生方、申し訳ございません。今になって猛省しております。お許してください）。しかし、教壇に立つために改めて教科書を真剣に読み返すと、昔は思いもしなかったことに色々と気付かされます。それなりに経験を積んだからなのか、教えるべき立場なんだという自覚がなせる技なのか、あるいはただ遅すぎたのか、教科書に書いてあることの意味とか、世の中とのつながりというものが理解できてきます。「ふーん、なるほどね」残念ながらこんな感覚は学生のころには味わうことができませんでした。講義の準備を進めながら、「やはり勉強というものは繰り返し行うことに意味があるのだ、ふむふむ」と勝手に1人で納得していたりもします。こういう感覚を学生諸君にも味わってもらいたいわけですが、そこまで伝えるのはなかなか難しいようです（私自身も、そこまで汲み取っていなかったですし…）。一通り経験したからこそ、すんなりと理解できるということは世の中には山ほどあるのでしょうか。「これくらい理解できないとだめだぞ！」と言いながらも、心の中では「きっと、その内にわかる時が来るよ」と小声で囁いております。「理解させなきゃだめじゃないか」という突っ込みも聞こえてきそうですが、所詮、己で会得したものでないと血となり肉とならないのだと、そんな声ははじき返しております。自分にとっても人生はまだ半分が経過した段階にすぎません。まだ見えていないことがたくさんあるのでしょうか。今はただ辛いと思うようなことでも、後から振り返れば、その意味を見出すことは簡単かもしれません。推理小説と同じように答えを知ってから眺めれば、こんな簡単なことはありません。犯人を示唆する多種多様な伏線・演出を堪能する余裕すら生じてきます。そんな風に色々な障害を楽しみながら生きていけたらなあと思ったりもしますが、ここに至り単位に縛られない余裕こそが教科書を理解するには必要だったのかというパラドックスに気が付き、はっとしてしまいます。まあ何にせよ余裕というシロモノは生きていく上での必需品です。髪を振り乱して仕事をするという姿は、乱れる髪が心細くなってくると様になりません。「ゆとり」がないと物事の表層だけを舐めるように生きていくことになります。まさに、期末試験を翌日に控えた昔の自分の姿です。いやいや、この原稿の締め切りを間近に控えた今の姿でもあります。忙しくても誘われれば飲みに行ってしまうというくらいの余裕が欲しいものです。こんな「ゆとり教育」だったら、大賛成です。

「ゆとりがない」と言えば、最近の学生さんの就職活動ですが、応用化学専攻も例外ではありません。自分が就職活動をしていた頃は「バブル絶頂」であり、「シューカツ」なんて言葉自体存在していませんでした。そんな頃しか経験していないので「シューカツ」に関して一言述べるのもおこがましいのですが、内定を貰えずに自信を失っていく学生の姿を見るのは残念でなりません。就職状況が厳しいのは、学生側にだけ責任があるわけじゃなく、むしろ経済状況とか社会不安だとか、大人たちが拵えてしまった状況にこそ問題があるのではないかと、少しだけ大人として反省してみたりもします。こんな社会をぶち壊していくのも若者の特権です。これこそロックの魂です。ほら、こんな風に考えると気持ちに余裕が生まれませんか？上手に責任転嫁するのも時には大事ですよ。飲みに行く暇も、心のゆとりも、自分で作っていくものなんです。ところで桜花会では昨年度から「卒業生との交流会」を開催しております。あまり、がっついた気持ちではなく、ゆとりをもって、「こんな先輩みたいになりたいなあ」くらいのかるーい気持ちで参加してくれると嬉しいですね。そして、少しでも進路を決めるときの手助けになれば幸いです。

■英語で授業を行う

伊藤繁和（応用化学専攻 准教授）

私のはじめて英語で本格的な講義を行うことを経験したのは、前にいた大学で、私のボスが担当していた講義のピンチヒッターでした。当時私のボスは、化学を専門としない外国人学部留学生（ほとんど日本語不可）向けの基礎有機化学の講義を担当していたのですが、ある日、その講義の時間帯にどうしても外せない急用ができたのだが休講には絶対にしたくない、ということで、私が代わりに講義をすることになったのです。受講していた学生は5人。0.5 スパンの小さな部屋で、ボスから事前に渡された教材（まだパソコンとプロジェクターではなくて OHP シートでした）を使い、アルカンの命名法とかエタンの立体配座の話などを、ブローケンイングリッシュで悪戦苦闘しながらやりました。授業時間を少し超過してしまっただけでもあったので、たぶん、評価は良くなかったのだろうと思っていますが、私にとっては貴重な経験でしたし、このことである程度、度胸がついたように思います。

今年度担当した大学院講義「有機反応・合成化学特論」（田中浩士先生と兼任）は、この経験が少しは活かしたような気がします。この講義は原則英語。これまでの経験があれば何とかかなるかなあと思いましたが、ですが、前述の講義と違って、この講義の受講学生の大半は日本人。言ってみれば、参加者のほとんどが日本人という国際会議において英語で研究発表と質疑応答をする時のような気恥ずかしさがありました。また、却って、不適切な表現はなるべく避けないといけない等、英語そのものに神経を使う必要があるような、プレッシャーのようなものを感じました。とは言っても、実際の講義では、講義＝喋り、ですから、文法の誤り等はそれ程気にしなくても良い、というふうに関き直って、意外と大胆にやったように思います。英語での授業、すごく大変ですが、おかげで沢山の経験をこれまでさせて頂いています。

さて、グローバル化が叫ばれる今日、このような英語による授業を増やす

ことは避けられないように思われます。賛否はともかくとして、実質的に世界の共通語が英語となっている現在の状況では、常に英語による授業や議論の必要性を認識しておかないといけません。私が見聞したところによると、ヨーロッパの非英語圏では、英語（による）教育が以前にも増して強化されているようです。たとえばフランスの理工系大学では、以前は英語教育にそれほど熱心ではなかったようですが、最近では英語での講義が講義全体の半分の割合になっているという話を聞きます。ある先生は、有機化学と計算化学の講義を担当されていましたが、有機化学はフランス語で、計算化学は英語で行っているとのことでした。英語の講義はすごく大変だが有意義だと仰っていたのが印象的でした。この間訪れたオランダの大学の講義はオランダ語と英語の授業が半々の割合とのこと。優秀な留学生を集める目的がオランダの大学にあるという話もききますが、英語の授業はその目的のために欠かせないのは当然でしょう。

「日本の大学では講義はどの言語で行っているんだ？英語での講義はあるのか？」と、ある外国人研究者に尋ねられたことがあります。日本での研究活動に興味を抱く外国人は決して少なくありません。が、彼らに日本に対する興味を更に大きくさせるために必要なことの一つは、英語での講義やセミナーが充実していることなのだろうと思います。勿論、日本人学生には十分な理解のためには日本語で授業を行う方が良いに決まっています。日本語での教育を粗末にするということもあってはなりません。ただ、常に変化している世界のなかの日本を考えると、大変ではあるけれども、「英語で授業」ということの重要性と必要性を強く感じてしまいます。

桜花会賞受賞者の声

桜花会では毎年、大学院博士課程の学生が選考した優秀な卒業論文発表者に対して桜花会賞を授与しています。平成 22 年 3 月の桜花会賞受賞者に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

◆深澤 賢（佐治研究室）

まず初めに、卒業研究発表会において桜花会賞をいただきましたことに深く感謝申し上げます。卒業研究発表についてはただただ無我夢中で、口頭発表は練習通りに話すことで精一杯でしたし、ポスター発表は先生、先輩方のご質問ご指摘に答えるのに四苦八苦していましたので、正直あまり記憶は鮮明ではありません。その代わり、発表が終わった後には自分なりの達成感と、それ以上の開放感とに包まれて歓喜していたことをよく覚えております。しかも、その上でこのような賞までいただけたのはその時は思ってもおりませんでしたので、受賞者として名前を呼ばれた際には驚き、非常に嬉しかった反面、発表が終わって浮かれすぎて名前を聞き間違えたのではないかと不安になり、思わず周りの人に目で確認をしたことが印象に残っております。

研究自体でいえば、卒業論文に使えるような実験結果がやっと出始めたのが昨年末のことで、それまでの特に十一月、十二月上旬あたりは結果が思うように出ないことに焦り、研究の方向性等を先生方と相談しつつ色々迷走していた苦い思い出があります。しかし、どんな時も佐治先生と荻原助教は気軽に相談に乗ってくださり、研究に関係の無い雑談も時に含めつつ和やかに話してくださいましたし、先輩方や同期生も親身になって励ましてくれたので、変に気が滅入ることもなく研究を続けることができたのが救いでした。そして、年明け頃から実験結果がそこそこ出始め、そこからさらに紆余曲折を経て何とかデータをまとめて発表まで漕ぎ着けることができましたが、実は欲を言えばもう一步か二歩研究を進めてから発表したかったという思いが発表前は強くありました。しかしいざ発表してみると、ただ研究を進めることとは別に、発表することによってしか得られない様々な収穫があることに気付かされました。特に、ポスター発表の場において先生、先輩方からいただいたあらゆる視点からのご指摘は、研究の問題点や今後の方向性を考える上で非常に役立つものばかりでしたので、むしろこの段階で発表しておいて良かったと思えました。見てくださった皆様方には感謝申し上げます。また、発表に向けて自分の考えを他人にうまく伝える方法を練習する中でも、他人が自分の研究についてどこを疑問に思い、どこに興味を持つかを自然と意識したので、自分の研究をより客観的に見つめることができ、それまで気にならなかった点を確認したりしたので、発表後には前よりも研究の穴を埋めることができました。やはり他の人の目に触れるというのは大切なのだと痛感しました。

余談ではありますが、競馬の場合の桜花賞とはその桜花の名にふさわしく、桜咲き乱れる時期に 18 頭立ての牝馬が 1600m を華々しく競うレースであります。今回私が

受賞させていただきましたのは応化の桜花会賞ですが、私の卒業研究がその名に恥じぬ華を持つものであったかを自問致しますと、まだまだ足りていないことは明らかであります。私は牡馬でかつ駄馬ではありますが、この思いを胸にこれからの二年間、修士論文という新たなゴールを目指して全力で走って行きたいと思っております。

最後になりましたが、この一年間熱心にご指導くださいました佐治先生、荻原助教、また度々適切な助言や励ましをしてくださいました研究室の先輩方、同期生の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

◆杉内 拓実（三上・伊藤研究室）

昨年度の卒業研究発表では桜花会賞を頂きありがとうございました。望外の結果に、驚きと嬉しさで胸がいっぱいになりました。この場を借りまして、研究をサポートしつづけてくれました三上先生初め、伊藤先生、相川先生、諸先輩に深く御礼申し上げます。

発表の日からこの原稿を書いている今日まで、わずか数週間ですが、とても長い時間が過ぎたように感じられます。必死に研究に取り組んでいた時と今では、時間の密度が幾倍も違って流れているのかもしれない。

振り返ってみると、卒業研究発表は、私一人ではなく研究室全体で臨んだといっても過言ではありません。6人の同期全員で、発表前夜に遅くまで練習したことはいい思い出です。より良い発表にしようと励み、取り組んだ結果、いつしか6人が1つになれたようにも思えました。今回頂いた賞は、研究室の代表として頂いたものであり、同期全員のものだと改めて感じています。もちろん、私たちを根気よく指導してくださいました三上先生、伊藤先生、相川先生がいらしてこそその研究結果であり、成果であることは言うまでもありません。

口頭発表は、始まると同時に頭が真っ白になりはつきり覚えてはいませんが、観客席にいた同研究室の先輩の姿を見て、次第に気持ちが落ち着いてきたことを思い出します。発表前に、三上先生から自信を持って話せば大丈夫と言われたことも、気持ちの支えになりました。

午後のポスター発表では楽しい時間を過ごすことができました。私自身が、一年間研究してきた中で、うまくいったこと、苦しかったことの全てをぶつける様に無我夢中でしゃべっていたような気がします。それが心地よく、普段とは違う視点で議論することができたことも有意義でした。

私の卒業研究は動的キラルなアゾ化合物を配位子とする金属錯体の光異性化に関する研究です。大変興味深い研究であると感じる半面、実験のしにくさという点もありました。特に実験に慣れ始めた9月以降は1人で考えなくてはいけないことが多くなり、ともすれば迷路に迷い込んだような状態が延々と続きました。そんな時に励まし、一緒に悩んでくれたのが同じ部屋の諸先輩であり、とりわけD1の小島さんで

した。小島さんは、自信を失いかけていた私に、1つ1つ実験の指針とそれ以外の部分においても親身にサポートをしてくださいました。今も感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

私は現在、大学院へと進学し化学環境学専攻に所属しています。新しい分野の研究においても、研究室で学んできたことを糧とし日々成長していきたいと思えます。

最後になりましたが、三上・伊藤研究室の皆さんと一緒に学ぶことができたことを心から嬉しく思います。本当にありがとうございました。

◆谷本 陽祐 (高橋・田中研究室)

はじめまして。高橋・田中研究室に所属しております修士一年の谷本陽祐と申します。昨年度の桜花会賞を頂き大変嬉しく思っております、ありがとうございました。卒業論文は「フェニルジエーテルリンカーを利用する効率的な糖鎖合成法の開発研究」というタイトルで提出しました。

研究室に所属してから一年が経ちますが、今でも研究室に所属した時の衝撃は忘れられません。まさにカルチャーショックでした。正直に言って、恥ずかしながら学部三年生までの私は勉学に対して真剣に取り組んでいたとは言い難い状況でした。授業こそ出席していたものの、それは単に成績のため、単位を取るためであって真に化学という学問を追求するためではなく、生活の中心は部活動などの勉強以外のものであり勉強は二の次三の次だったのです。その状況で研究室に入ってみると、そこにはまったく違う世界が広がっていました。研究室内では、毎日実験を行っているのはもちろん、常に化学の研究についての議論が交わされ、それは日常会話の域にまで達していました。こんなにも真剣に、こんなにもまっすぐに皆が皆、研究に没頭している。なんという熱い人たち、熱いところなのだろうと感動しました。そして同時に、研究室の先生は勿論、先輩方の化学に対する知識の量、思慮の深さに圧倒され自分の力のなさを思い知らされました。

それから、先輩方に追いつくべく私の研究の毎日が始まりました。このように何もわからない私でしたので、ただひたすら周りに押されながら突っ走り、気づけば一年が過ぎていたという感覚です。研究室の生活は決して楽ではなく、家が遠いのもあり毎日終電帰りの日々で疲れて寝過ごしてしまうこともしばしばでした。特に卒論発表前の追い込みの実験は厳しく、研究室の武内先輩に付き合っていたいただきながら徹夜で行ったワンポットグリコシル化反応は生涯忘れることはないと思えます。

ただ、そのような厳しい中でも、いや厳しい中だからこそか、化学、特に有機合成の面白さを感じる事ができたように思えます。(もっとも先生、先輩方からは「まだまだ甘い!」と怒られますが。)これから修士課程に進むわけですが、今度はただがむしゃらに頑張るだけではなく、しっかりと自分で考え行動できる独創性のある研究者になりたいと思えます。

最後になりましたが、高橋先生を始めとするスタッフの皆様、研究室の先輩方、同期の仲間、特に最後まで直接指導して頂いた田中先生に感謝したいと思います。本当

にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

◆ 塩原 将央 (鈴木・高尾研究室)

この度は、卒業研究発表会におきまして桜花会賞を頂き、誠に有難うございます。卒業研究発表会前日に口頭発表の通し練習を行いましたところ、制限時間4分間のところ、私は測定不能と言われるほど長ったらしいまとまりのない話を続けたため、帰宅後4分間以内に発表が終われるよう、自分の部屋でひたすらぶつくさと練習を行いました。発表当日は、奇跡的に4分間以内に発表を終えることが出来、それだけでとても満足しておりました。しかし、皮肉にもこの度頂いた桜花賞の名前が「発表はダメだったけど、ポスターはよかったで賞」というのでありますから、なんともやりきれない気持ちでいっぱいです。

卒業研究発表に関してもそうなのですが、私の悪い癖として、行動が遅く何事も期限ぎりぎりまで引き伸ばしてしまうことがあります。卒業論文の提出も3月29日にやっとの思いで提出し、何を隠そうこの桜花賞受賞コメントすらも提出期限ぎりぎりにこうして書いているのです。この一年間は、この私の悪い癖をひたすら痛感する一年でした。実験をするごとにわかりやすくこまめに実験結果をその都度まとめることをせず、「あとでやろう」の繰り返しで後々に非常に苦勞するというのを幾度となく経験しました。一方その傍らで、同期の諏訪君は、計画的に実験を進めつつ、こまめに実験結果をまとめ、焦ることなくいつも楽しそうに実験を行っておりました。その姿を見習って何度も自分を律しようとしていましたが、ダメでした。そう簡単には人の性格は変えられないものです。

しかし、そんな甘い自分を許せるのも学生のうちだけだとも思います。私はこの春、大学を卒業し社会に飛び出しますが、社会で生きていく中で、「あとでいいや」が許されることはないのだと自分を厳しく見つめ直し、精一杯頑張っていきたいという所存です。

最後になりましたが、一年間ご指導して頂いた鈴木先生、高尾先生、大石先生をはじめ、秘書の市川さん、研究室の諸先輩方と同期の仲間に関心より感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

◆ 王 丹 (和田・山中研)

先日行われた卒業研究発表会において、桜花会賞をいただいたことに、感謝申し上げます。

自分は留学生で、そして私が知っている限りに、桜花会賞をいただいた留学生がないため、まさか自分が受賞できるとは思ってもいなかったため、その日、名前を呼ばれた時は、たいへん驚きました。気持ちが落ち着いた後、4年間の大学生活を思い返したとき、非常に充実した学生生活を送ることができたと思えました。

桜花会賞は私にとって、非常に励みになるものです。研究室での生活は学部3年までの授業中心の生活とはまったく違い、新しい経験の連続でした。正直なところ、4年生の1年間は、私の自信がますますなくなりました。研究室に入ったばかりの時、

先生とディスカッションし、自分の日本語のできなさに気付きました。英語が得意ではないため、雑誌会や輪講の準備（英語の論文を読んだ後、日本語でまとめること）は、他の人よりも数倍の時間がかかりましたし、研究でもなかなか結果はできませんでした。また、先生方や先輩方の指導なしには動けないこともありました。日々痛感したのは、自分の知識が足りなく、実験技術も熟練していないことです。何度か自分は研究に向いていないので、あきらめたほうがいいかなあと思いました。しかし、和田先生がいつも親切に私を慰め、励ましてくれましたため、これまで頑張っただけで、頑張っただけで研究を続けた結果、卒業研究発表会において、桜花会賞をいただき、本当に感動しました。

今年から、いよいよ大学院に進学し、これからは授業と研究があり、さらに忙しい生活を送ることとなりますが、積極的な態度で、授業と研究を両立させるように頑張りたいと思います。

最後になりましたが、一年間ご指導をいただいた和田先生、望月先生をはじめ、先輩方や、ともに苦しみを乗り越えた同期の二人に感謝します。本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひいたします。

◆吉成 彰裕（碓屋・桑田研究室）

この度は、このような賞を頂きありがとうございました。発表を終えた時点では、桜花賞をとることなどまったく想像していませんでした。今回賞をいただけたことは、これからの自信に繋がると同時に、この1年間努力してよかったと思えました。

この1年を振り返ってみますと、まず研究室に所属する段階では、環境や生活が学部生活と比べて大きく変わり、それに対応できるのかという大きな不安を抱いていたことが思い出されます。しかし、驚くほどフレンドリーな先輩方や、親身に相談にのっていただける先生方のおかげで、そういった不安はすぐになくなり、とても楽しく、充実した研究室生活を送ることができたと思います。また、こういった先輩や同期の仲間とのつながりは、5月から始まった南1号館の改修に伴う研究室の引越しを通して強いものになり、今考えると、辛かった引越しがとてもすばらしい事に思えます。

研究面では、大学院入試の前までは、引越しもありあまり実験が進まず、結果と呼べるものはほとんど得られていませんでした。しかし、その後、心機一転配位子に少しだけ手を加えたところ、新規の化合物が徐々に得られるようになり、まだ誰も作ったことのないものを作る喜びを感じるとともに、化合物の結晶の輝きに感動しました。また、卒業論文発表の直前には、なかなかできないと思われた化合物の合成に成功しましたが、それを発表するためにデータをしっかりと集めなければならず、そのために発表の直前まで実験を繰り返していました。1年間の山場はここにあったと思います。

このような山場を乗り切れたのも、直接指導していただいた桑田先生のおかげだと思います。桑田先生には1年間を通して、発表する文章の訂正や、その効果的な話し方などを教えていただき、大変感謝しています。修士課程に進んでからは、桑田先生の手を煩わせないよう、自分自身努力していこうと強く思っています。

これからは修士課程に進学することで、講義も多くなり、実験できる時間が限られてきますが、だからといって実験を中途半端にすることなく、熱い気持ちを持って研究に取り組みたいと思います。

最後になりましたが、ご指導いただいた碓屋先生、桑田先生、榎木先生をはじめとする先輩方や、互いに励ましあった同期に感謝いたします。1年間ありがとうございました。

桜花会企画のご案内

今年度も、卒業生と教員、現役学生との交流を深める企画を予定しております。工大祭オープンキャンパスでは、「くらりか（蔵前理科教室）」との共催で体験実験教室を開催予定です。化学の面白さを子供達に伝えるための企画をOB方々のご協力のもとで行う予定にしております。また、本年度より、桜花会のご協力のもと企業見学会が開催できることになりました。本年度は、三菱化学技術センターの専門的な知識が有る程度身に付きかつ就職が現実の課題になる前の学部3年生を対象とした最先端の研究施設を見学会とする予定にしております。また、今年度も卒業生による企業説明会を開催する予定です。ご協力いただける会員の方は桜花会事務局までご連絡いただけますと幸いです。桜花会会員の皆様には、ぜひこの機会にご来学いただき、旧交をあたためるとともに、学生や教員とも交流を深めていただければと存じます。なお企画の詳細につきましては桜花会ホームページに掲載いたしますのでご覧ください。

★★★工大祭オープンキャンパス ★★★

くらりか共催体験実験教室、ポスター展示

日時 10月23日(土)、24日(日)

場所 東京工業大学 大岡山西4号館 2階学生実験室

★★★★☆三菱化学科学技術センター見学会★★★★☆

日時 11月12日(金)

場所 三菱化学科学技術センター

★★★第2回学生と卒業生との交流会★★★

日時 12月11日(土)

場所 東京工業大学 東工大蔵前会館

★★★卒業祝賀会★★★

日時 平成23年3月28日(月)予定

詳細は後日桜花会ホームページ、電子メールなどのご案内いたします

会員の声

桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その振込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方が結構いらっしゃいます。ここでいくつかのメッセージをご紹介しますと思います。

植田 賢一 (S14)

96 才です。孫娘が来年東工大を受験します。跡継ぎが出来るのを楽しみにしています。

西山 徳三 (S22)

22 年卒応化は毎年 11 月にクラス会をしています。

清弘 光生 (S36)

神原研同期・応化・化工同期会でよく集まっています。

金網 久明 (S26, S36 論博士)

専門分野の進歩から目を離さず、趣味の謡曲と仕舞にも力を入れています。

市川 惇信 (S28, S33 博士)

近況 <http://homepage3.nifty.com/a-ichik/>

山本 克行 (S34)

仕事：マンションと教室の掃除。ガイドヘルパー、ボランティア病院内、運転。勉強：倫理研究。健康：真向法健康体操

齊藤 正巳 (S39, S41 修士)

来る 10 月 31 日 (2009 年) 化学切手同好会のメンバーとして蔵前会館を利用します。

猪狩 恭一郎 (S32)

三つの顔で元気しております。鉄道少年の顔、技術者青年の顔、エッセイ遊び老年の顔。

高尾 昭子 (H7, H12 博士)

長津田キャンパス資源研におります。

吉田 将人 (H13, H18 博士)

土井先生とともに仙台で頑張っています。

伊藤 喜光 (H13, H18 博士)

東大院工に着任して 1 年です。

—あとかぎ—

今年の夏は、愚息（小3）所属の少年野球チームの練習のお手伝いをしました。真っ黒に日焼けして、ボールを追いかける5、6年生達はとても頼もしく見えます。また、そんな子供達が熱射病にかからないように、スタッフや保護者は、いろいろと気を配らなければなりません。今の子供達は、なにをするにも親の出動が要求されます。いやいや、自分の子供の頃はこんなに暑くなかった気がします。。一方、近くの進学塾には、朝からかばんと水筒と携帯電話と携帯ゲーム機をもった子供達、夕方8時ともなるとその前にお迎えの車が列を作ります。自分が子供だったころと比較して、夏休みの子供達の姿も大きく様変わりした気がします。この子供達は大きくなるとどうなっていくのでしょうか？

さて、我東工大（応用化学専攻）も大きく変わってきました。南一号館は、今年、耐震改修が終わりました。それに伴い、入り口も従来の場所から変更になりました。（表紙参照）。グラウンドは人工芝になりました。目黒線（旧目蒲線）からもよく見えます。また、コンビニエンスストアも学内にでき、学生達の強い味方（？）になっておます。さらに、学生さんの気質もだんだんかわってきているような気がします。従来のこだわり型（おたく型）東工大生の数は減っているような。これから、社会環境の変化と共に、学生さんはもっともっと変わって行くのでしょうか。会員の皆様、そんな変わりゆく東工大を感じるために、時間の都合がつけばぜひご来校ください。

最後に、本年も無事に桜花会誌を発行することができました。原稿を担当してくださった各執筆者の方々、編集事務作業をお手伝いくださいました河村彰子様どうも有難うございました。（HT）

平成 22 年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-S1-22

東京工業大学 大学院理工学研究科 物質科学専攻 佐治哲夫

電話 03-5734-2627 Fax 03-5734-2627

E-mail: cherry@apc.titech.ac.jp

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>